

# 雄藏と秀策

長房囲碁同好会会長 池口隆久

**井** 碁史上において、本因坊秀策はあまりにも有名であるが、太田雄藏は、その陰に隠れているかに思える。安田栄斎(秀策)は天保8年上野車坂下の本因坊家道場に入門している。当主は丈和、名人碁所を兼ねていた。まだ、直接師匠には打ってもらえはしなかったろう。

秀策と雄藏の初手合わせは、天保13年(1842年)5月3日だった。雄藏は36歳で六段、秀策は14歳(二段)だった。この時の手合いは、2子置き打っている。8月7日までに11局打ち、秀策の7勝3敗1持碁だった。囲碁手合いが先二に改められた。

秀策は兄弟子たちの研究手合いに明け暮れていた時、当主の丈和が栄斎(秀策)の碁に目を留め「これはまさに150年来の碁豪である。わが門風はこれより大いに拳がるだろう」と言ったという。本因坊家跡目の秀和には、後になりに打ってもらっているが、一番の好敵手は太田雄藏であった。



秀策は、雄藏に鍛えられたと言ってもいいのではないかと。雄藏も打つたびに強くなっていく秀策との手合いをかなり楽しんでいたようでもある。雄藏という生涯の好敵手がいたからこそ、秀策が大成したのではないかと。また、秀策を秀和の後目に決めた丈和も、才能を見抜く力があつたと言うべきか。

雄藏という人物についておもしろい逸話が残っている。彼は、今でいう格好いい男で、僧形になるのが嫌で七段昇段を承知しなかった。当時は、七段になれば頭を丸めてお城碁をつとめる義務が。彼はそれを嫌ったのである。また、彼の碁には目外しの碁が多いが、性格も派手であつたようだ。

私は、道策・丈和・秀和・秀策・秀甫などの系列の人が好きだったが、派手な雄藏はあまり好みではなかった。だが、一度試みに雄藏の碁を並べてみたら、驚いた。手筋の宝庫のような碁であった。もうひとつ面白いと思ったのは、雄藏は、どの一手にも相手の意図をはぐらかし、逆手に取るような工夫を随所に見せてくれる。こういう相手と碁を打っていたら、秀策も強くなったはずである。もちろん秀策の、無理をしない碁風、理知的な読みの深さは素晴らしいが、雄藏の、華やかな筋っぽい囲碁も素晴らしいと思う。

丈和の娘を妻とし、坊家の卓抜した先輩たちと、生涯の好敵手太田雄藏に恵まれた秀策は幸せであったろう。それも、親孝行で周囲の人に対してやさしかった秀策の人柄がそういう環境を造ったとも考えられないか。

(2016年12月 八碁連だより 304号)